

【一般部門】大賞

『私は鏡』

作：くろいわ 由卯 選考と作画：服部 幸平

ストーリー

壁に掛けられている鏡の私。殺風景な部屋を映す毎日に退屈している。ある日、強風にあおられた私は落ちて割れ、捨てられる。私のカケラのひとつをカラスがくわえて飛ぶ。広い野原に落とされた私は、青空と雲を映し出す。やがて夕焼けや月や星を映し、心地よい静けさに包まれていく。これからずっと、自由と幸せを映せることを鏡の私は願う。

解説

主人公の擬人化された“鏡”は、風にあおられて割れてカケラになり、カラスに運ばれて野原に落ちます。鏡の私はこの一連のなりゆきの結果を幸運ととらえます。それは、環境の変化がもたらした場所で、今まで映し出したことのない風景と出会えたからです。

思いがけないできごとに戸惑い悩み続けるか、それとも好機ととらえるか……。鏡である自らの宿命を受け入れ、青空や太陽、月や星を映し出せることに喜びを感じるのです。

鏡の詩的な語り口とシンプルな情景描写が、時間とともに変わりゆく空の美しさに気づかせてくれます。

私たちの心に鏡があるとしたら、何を映し出しているのでしょうか。

人間の欲望が混沌とした世界、喜怒哀楽に翻弄される世のなかであっても、

「生きて、誰のものでもない空を眺めることができる幸せ」を再認識させてくれる物語です。

ラストの「これからずっと自由と幸せを映せますように」の一文に、作者の願いが込められている作品です。

受賞者プロフィール

くろいわ 由卯 (くろいわ ゆう)

[東京都]

毎日、姿見をのぞく自分は、服装や髪型など変化があるのに、鏡に映るまわりの光景は変わらないと気づきました。鏡にいろいろな景色を見せてあげたいと考えたら、次々と情景が浮かんできました。何気ない日常にひそんでいる物語の種との出会いが、書くきっかけになります。どこにでもありそうなのに、誰にも気づかれていない世界を書いてみたいと思っています。

本賞の第39回入賞受賞

【こども部門】大賞

『おおかみ達の願い事』

作：土佐 弥依 選考と作画：国栖 晶子

ストーリー

雪山に住むサンタクロースとその手伝いをする妖精のトンテ達。クリスマスを前にトナカイがけがをし、足跡からオオカミの仕業とトンテ達は考える。疑われたオオカミ達は“真実の願いの葉っぱ”に思いをつづる。葉っぱはサンタの元に届き、トンテ達はオオカミ達の家へ行くことに。家の様子から「みんなと仲よくしたい」オオカミ達の願いを知る。

解説

近年のAI(人工知能)技術の発展が、文章・画像・音声のAI生成を可能にしています。半面、インターネットの偽情報やSNSによる誹謗中傷などが、大きな社会問題となっています。私たちにはネット上の情報を吟味し、真偽を判断するリテラシーが必要です。

このお話に登場する“妖精”や“おおかみ”。このキャラクターは、既製の物語からイメージがある程度定着しています。“妖精は無邪気”“おおかみは乱暴”……というように。ストーリーでは妖精達が「傷つけたのはオオカミ達だ」と思い込み、町中にふれ回ります。ぬれ衣をきせられたオオカミ達は、サンタクロースへ本当のことを伝えようとします。サンタクロースは妖精達に「自分自身で確かめるように」とうながします。

真実を理解するには、事実を知り心で感じ、そして考える。既成概念や先入観にとらわれず、偏った視点でものごとを判断していないかと自問する必要があります。真実への気づきで認め合い尊重し、そして信じていることができる——サンタクロースはそれを諭すことなく見守ることで伝えています。

受賞者プロフィール

土佐 弥依 (とさ やえ)

[新潟県 10才]

チャレンジのつもりで、アンデルセンのメルヘン大賞に向けて書きました。もともとオオカミが大好きなので、主人公にしました。物語の中ではサンタクロースが、トンテとオオカミを仲よしにしてくれます。世の中の人が「このサンタクロースのようであってほしい」と思いをこめました。将来は動物病院の先生か、建築家(大工)になりたいです。

【一般部門】優秀賞

『かみなりさまのおかげでね』

作:宇都宮 みどり (うつのみや みどり) 選考と作画:岡田 航也

プロフィール

〔東京都〕

鬼とカミナリ様は見た目が似ている……それらが登場するお話を書いてみたいと思いました。鬼は悪者になりがちですが、人間と同じような親心もあると思い、鬼と人間が敵と味方のような区別のないお話にしました。見た目が違って仲よくなれることも読者に知ってほしいです。今後は、高齢者と若い人の生活での出来事などを書いてみたいです。

ストーリー

人里離れた山奥の村で仲よく暮らす鬼たち。日照りが続き、鬼たちは食べる物に困っていた。ある日、鬼の子のおに太郎はケガをしたカミナリ様を助ける。カミナリ様の代わりにおに太郎が雨を降らせることに。太鼓のたたき方を教わり、カミナリ様の相棒の雲に乗って畑や森に雨を降らせていく。途中で人間の子と出会い、人間の村にも雨を降らせる。

【一般部門】優秀賞

『秋の音楽会』

作:小林 栗奈 (こばやし くりな) 選考と作画:永野 敬子

プロフィール

〔東京都〕

ずっと文章を書いてきました。良い時も悪い時もあり、自分の力のなさに絶望したこともありました。20年、30年前の自分に会ったら、伝えたい気持ちを作品にしました。天才でなくとも、好きなことを続けていくことは人生を豊かにします。書くことは自分の心に明かりを灯すような作業です。それがいつか、別の誰かの心に届けば嬉しいです。

ストーリー

バイオリン奏者の夢に挫折した青年は、故郷の森でひとり最後の演奏をする。森から老人が現れ「5年後まだ音楽を愛していたら、ここに舞台と聴き手を用意して待っている」と言う。5年後の秋、森を訪れた青年を老人たちが待っていた。青年は心に沁みる音楽を奏でたい想いで演奏する。演奏後、老人たちの姿はなく、朽ちた倒木だけが残っていた。

【一般部門】優秀賞

『おひさまのランプ』

作:正岡 知子 (まさおか ともこ) 選考と作画:ゴトウ ノリユキ

プロフィール

[大阪府]

秋の気配を感じた時、“夕日に照らされる柿の実の様子”に惹かれていたことを思い出しました。それを物語にできないか…と書き始めました。秋が大好きですが、季節のうつろいを伝えたいという思いで完成させました。季節を感じた時、様々な自然現象にふれた時が、書くきっかけになります。読んだ人の心の養分となる作品を目指したいです。

本賞の第40回入賞受賞

ストーリー

冬眠のためのどんぐりを集めるシマリスとクマ。ススキ丘の柿の木の下で、秋に別れを告げるように一緒に叫ぶ。その夜、眠れないシマリスとクマは降り注ぐ星の光に導かれ、ススキ丘へ行く。光る柿の実とあたたかい落ち葉を見つけ、それぞれの巣穴へ持ち帰って冬眠する。春になり、目覚めたシマリスは芽が出たどんぐりを持ってクマの元へ行く。